文久壬戌 夷匪入港録 一

標示 巻一

一和夷往復書簡集録

内閣文庫
和書
三一三一四號
一八冊
一八五函
二三架
254

111 閣

和書 三一三一四號

史

内閣文庫
番號 和 31314
冊數 18（1）
函號 185 254

185-254

国立公文書館
National Archives of Japan

夷匪入港録巻一

目次

和夷往復書簡集彙

第一

一英國公使ヨリ御老中衆エ相贈候書簡寫

第二

一外國御奉行竹本圖書頭殿ヨリ各國岡士エ
被相贈候御書簡寫

第三

一魯國公使ヨリ御老中衆エ返簡寫

日本政府圖書

国立公文書館 National Archives of Japan

第四
一魯國公使ヨリ　公方様エ指上候書簡寫
第五
一亞米利加人ヨリ通辨官立石斧次郎ニ相贈
候書寫
第六
一法蘭西セ子ラールヨリ江戸在留ミニスト
ルエ相贈候書簡寫
第七
一御老中衆ヨリ英國人エ被相贈候御返簡寫
第八
一御老中衆ヨリ佛國人エ被相贈候御返簡寫
第九
一御老中衆ヨリ阿蘭陀外國事務大臣エ被相
贈候御書簡寫
第十
一同斷
第十一
一御老中衆ヨリ佛國公使エ被相贈候御返簡
寫

修史館

第十二
一御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御書簡
寫

第十三
一御老中衆ヨリ英國人エ被相贈候御返簡寫

第十四
一御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御返簡
寫

第十五
一御老中衆ヨリ佛國公使エ被相贈候御返簡
寫

第十六
一御老中衆ヨリ魯國外國事務大臣エ被相贈
候御書簡寫

第十七
一御老中衆ヨリ英國公使エ被相贈候御返簡
寫

第十八
一御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御書簡
寫

国立公文書館
National Archives of Japan

第十九

一英國ヨリ各國エ相贈候書簡寫

第二十

一英國公使ヨリ御老中衆エ相贈候書簡寫

第二十一

一御老中衆ヨリ英國公使エ被相贈候御返簡寫

附

一別紙寫

第二十二

一御老中衆ヨリ英國岡士エ被相贈候御書簡寫

第二十三

一御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御返簡寫

第二十四

一英國公使ヨリ御老中衆エ相贈候書簡寫

第二十五

一御老中衆ヨリ各國公使エ被相贈候御書簡寫

夷匪入港録巻上

和夷往復書簡集彙

第一

英國公使ヨリ御老中衆ヱ相贈候書簡寫

西暦千八百六十二年第一月二十三日

我文久二年 十二月十六日

余明日横濱ヲ出立セント欲ス而シテ多分ハ新年ノ後若ニ大君ヨリ贈ル書簡ノ回答ヲ落手シタル後ナラテハ歸ラサルヘシ余其回答ヲ渡シ届ケ且ツ台下之大緊要ナル會合ヲナシタル後ニ

歴史課

直ニ歐羅巴ヘ行ント欲ス是我政府ヨリ既ニ此免許ヲ受ケタリシカ故ナリ

余名下ニ既ニ言ヒシ通吾輩既ニ始シ所ノ諸件ヲ紙上ニ書認之ヲ明白ニ決着スヘキ事最大緊要ナリ何者若斯ク為サレハ我交代人ハ事ヲ取扱フニ恐クハ少シ者此諸件ヲ知ラサルヘシ且余ニ比スレハ權勢ヲ任スルコト少ナカルヘキ者ナルヲ以再ヒ根元ヨリ為シ初メサルコトヲ得サルヘシ亦既ニ為シタル諸事ハ徒ニ時ヲ費シタル者トナルヘケレハ也未ニ決セサル所ノ諸件左ノ如シ

第一御殿山ニヲイテ使臣館及ヒ呈シタル書簡ノ回答ニ益ニ立ツヘキ一存念ヲ台下ニ既ニ贈リタリ其回答ハ余ノ必要スル所ナリ是故ニ余台下ニ請ハサルコトヲ得ス三日或四日間台下ノ新年前ニ右回答ヲ余ニ贈テ余ヲシテ緊要ナリト考ル所ノ改正ヲ為スヘキ暇アラシメンコトヲ乞フ

第二横濱ニオイテ牢屋役所及ヒコンシユル館ノ勘定雜費并ニコンシユル館ヲ建ル地ノ廣狹

及ヒ其借地料此地料未タ定ラザリシ然レトモ府内ノ一部ヨリ下直ナラザル事ヲ得ス是其地府内ニ在ラザルカ故也

第三不列顛人貨物前渡シタル金子違約等ノ為ニ自己ニ附属スヘキ金額ヲ日本人ニ出セト久シク需メタリシカ正直満意ナル双方ノ一決ヲ以テ其需ヲ處置スルコト此金額ヲ總計スレハ三万トルラルト四万トルラルノ間ニアルナリ不列顛人ヨリ日本人ニ需ムル所ヲ平均スルニ緊要ナル取極ヲ直ニ為ス時ハ余タ方ヨリ不列顛人ヲシテ拂フヘキ借地料ヲ盡ク拂ハシメント用意セル此地料者余了簡違ヒセサレハ大約五万トルラルトナル若シ奉行コンシユルモエウステン君三人相共ニ取極ル所ノ金子新年前ニ残ラス拂盡サヽレハ日本政府強テ暫時間ニ之ヲ拂ハシムルコトヲ公然トシテ企テサルヘカラス但此日限ハ日本上官ト不列顛上官ト相談シテ之ヲ一決スヘシ恐惶敬白

不列顛女王ノ特派公使兼
全権ミニストル

日本在留書記官 アールコツク

エル ユースデン譯

呈

日本事務宰相台下

二月十四日

第二

外國御奉行竹本圖書頭殿ヨリ各國岡士

エ被相贈候御書簡寫

以書簡申入候然者外國人當港居留中雇入候我國遊女并出生之兒子者出生之日ヨリシテ男女ニカヽハラス其國之人別ニ属シ我國籍名ニ者差加間敷旨今般我外國事務執政ヨリ被命候ニ付以後其心得ニ而其國人エモ相達置候様存候

此段申入候謹言

二月十四日　竹本圖書頭

第三

魯國公使ヨリ御老中衆エ返簡寫

呈

日本國事務宰相台下

文久一年八月二十四日ノ至高ノ爾ノ書翰ヲ以此處ニ於テ慥ニ得タリ

魯西亞ト日本トノ間ニ於テ隣境相接スルヲ以テ舊来懇親ニスルヿヲ疑ハス殊ニ其都合ヨキ時節ヲ失フ能ハサルヲ知ル是ニ因テ吾カ終リノ夏東洋ニ於テヱスカドル船對馬島ニ立寄リタル時爾等書記スル處ノ事ヲ記憶セリ

其時已ニ受得タル箱館在留ノ吾コンシユルノ告ケ知ラセニ因テニーム及ヒ箱館奉行ノ判斷ヨリ出ル其詳カナル記録ヲ見ル其時解シ誤リ心得違シテ直ニ對馬島ヲ出帆ス

日本領地ニ於テコマンジラ船ヲ自ラ守護スル爲ニ湊會ニ於テ造營スルヿヲ許サレタリ

箱館奉行ヨリ不自由ノ事缺キ等ヲ辨スル爲ニ

其支配スル場所ニ諭シ示セリ其後彼ノコンシ
ユルゴスケサツノフナリニサントヘートル府ニ於テ使
節トメ指越ス處ノスタートスコムソウエート
ニク都府評議官ノゴスケウヰツウニハ其書翰ノ事件
ヲ示サス
今ニ於テハ此事件ヲ他邦ニ盡ク詳明ニスルヿ
ヲ至高ノ尓ニ願フ
高官ノ爾ト我ト任スル最初ノ令書ヲ受ンヿヲ
願フ
千八百六十二年第二月廿日サントヘートト

ルヒユルニ於テ外國事務ミニストルゴ
ルカゴヴ

第四

魯國公使ヨリ公方様エ指上候書簡寫

呈

日本領地ヲ支配スル高名ナル大君
貴尊ナル大君ノ書翰ニ就テ吾外國事務ミニス
トルニ命シ日本島ノ西國地方ニ於テノ開港ト
江戸大坂兩府ニ於テ交易ノ定ノ延期ヲ尓ノミ
ニストルニ報告セシム

高貴ノ人ニ吾懇情ナル仁恵ノ返答ヲ再ヒ書記シテ日本領地ニ於テ吾カ廉直實義ナル丁ヲ知得スル丁ヲ希フ

日本ニ甚タ近ク隣レル魯西亞國今共ニ應接スルニ因テ兩國ノ間ニ於テ以前ヨリ懇親ナル結約ヲ尚固クスル丁限ナカルヘシ

爾ノ領地ノ一致ト備リタル安全ヲ祝ス

千八百六十二年二月廿日サンリトヘートルヒユルリニ於テ與ヘル吾カ方ノ第七年前ニ卽位スルアレキサントル

四月十六日

第五

亞米利加人ヨリ通辨官立石斧次郎ニ相贈候書簡寫

西洋紀元一千八百六十二年第五月十一日

文久二年四月十六日

斧次郎君へ

汝今日余ニ御殿山及其地ニ建ル異人館ノ事ヲ語セリ余カ嚮ニ云ヘル丁及何ノ故ヲ以テ

其事ヲ云シ譯ヲ爰ニ述ントス
横濱ニ居レル日本人種々ノヿヲ言フヲ聞タル中ニ彼等怒リテ御殿山ノ遊場所ヲ奪フテ異人ニ與ヘタリト云ヘリ余謂ラク人民ノ望ヲ傷ハサル様取扱フヿハ日本政府ノ為ニモ横濱ノ異國人ノ為ニモ利益アルヿナルベシ○日本ノ内加州信州常陸等ノ地ノ人民怒リテ乱ヲ為スヿ余側ニ聞ケリ御殿山ハ　家光公ノ時人民ノ遊樂ノ為ノ地ト定メラレタリ今何ノ故ヲ以テ人民ノ均シク受ケタル地ヲ奪テ異國人ニ賜ヒタル乎」大名方外國公使ノ一人ノ所存ヲ怒リ居ルヲ以テ大ニ御老中ノ心配ヲ生セシヿ余此レヲ知ル今ハ人民ノ外國公使ヲ悪ムヿ大名ト異ナラス若シ御老中ヨリ英國政府ニ對シテ日本ノ使者ノ為ニ「ハイテハルク」（倫敦府ニアル華麗ナル園囿ノ名）ヲ借シ與フベシ佛國政府ニ對シテハ「トイルレリース」（巴里斯府ニアル華麗ナル園囿ノ名）ヲ借シ與フヘシト云ハヽ二國果シテ此レヲ許サンヤ否ヤ彼必此ヲ許サヾルベシ
英佛二國ノ「ハイデハルク」及「トイルレリース」ハ

猶日本ノ御殿山アルカ如シ
故ニ余謂フニ日本ノ政府今猶外國公使ニ對シ御殿山ハ借シ與フヘカラスト云ヒ先方ヨリ其レニ付テ言出セル丁ハ取用ヒサルヘシ日本政府ニテ此ノ如ク取行フトモ異國ニテ如何トモ為スヘキ様ナカルヘキヲ知レリ此ノ如クナレハ日本政府ノ權威強クナルヘシ其故ハ國内ニ外國人ヲ置ケハ日本ノ威勢次第ニ弱クナレハナリ外國人ハ日本ノ政律ヲ用ヒサレハナリ此ノ如クニ異人ヲ居ラシメタルヲ以テ支那此レカ為ニ弱クナレリ
異國人ハ自國ノ法ヲ行ヒ自國ノ「コンシユル」ノ下ニ住タルヲ以テ罪人アレトモ日本政府ニテ自由ニ之レヲ罪スル丁能ハス余謂ラク異國商人ヲ江戸ニ居ラシメ公使ヲモ商人ト共ニ中川尻ノ如キ地ニ居ラシムルヲ好シトスヘシ今ハ公使江戸ニ住シ其行フ丁何事タルヲ知ルモノナシ余ハ就中一公使ヲ思ヘトモ御老中ノ考ヘハ此レニ異ナリ公使ハ商人ト離レ居ルヲ好ムカ故ニ其事行ヒ難シ御老中ノ弱ミハ條約中ニ

異國人自國ノ政律ニ由テ行フベシト云ヘル一條ニアリ一旦結ヒタル條約ハ二三年ノ間ハ變革スルヿ能ハス日本ニテハ日本人英吉利佛朗西亜墨利加魯西亜ニ居ル時此ノ如ク爲サント言張ル外言フヘキヿナシ

英吉利佛朗西魯西亜ニテ此事ヲ日本ニ許サハ他國ニモ亦許ルスヘキ道理ナルカ故ニ必ス許サヽルヘシ

日本ニテ條約ヲ結フニハ帝家左ノ事ヲ知ラザルベカラス　家康公昔時ニ在テハ英明ニテ其法ニ由テ國家太平ト成レリ然レトモ今ハ時勢昔時ニ異ニシテ政府ニ運上ヲ取リ船ヲ造リ大砲ヲ鑄人ヲ教錬シテ他國ト優劣ヲ競ハサルヿヲ得ス

英國政府ノ費用ハ毎年二万トルラルナリ其數ハ日本ノ費用ト相違セリ然レトモ日本ハ英ヨリ冨饒ノ國ナリ日本ニテモ英ノ如ク綿布ヲ織ル爲ニ蒸氣機具ヲ用ヒハ其織出ス所東方諸國ニ充滿スヘシ

余カ汝ニ書ヲ贈ルハ余カ日本ヲ喜フヿ一端ノ

ミナラサレハナリ余カ言フ所ハ汝解スヿ能ハサルヘシ
汝ノ多福ニシテ且其官位昇進スルヲ聞ヲ望ム
汝ノ親信友
ウヰルムテクション
但御殿山一條者御殿山夷館造等始末ニ載ス参考スヘシ

五月三日

第六

法蘭西セ子ラールヨリ江戸在留ミニストルヱ相贈候書簡寫

西洋紀元千八百六十貳年第五月三日

我文久二年四月五日

第一條

此度唐國之内配領安南國ヱ差廻候蒸氣船日本其許在留港迄相送候船便一書中入候一別以来

時々之書翰日本國大君使節方法黎斯着迄無遅滞相違候委極之義承知イタシ候此度使節方取扱方之義者格別念入一類同様アンペラール皇帝ヲイフヨリモ申含新聞紙ニモ相見得候通首尾相齊尤北亜墨利加例則モ相見得候得共彼ト我ト者儀法モ相違ヒ去年中シヤム國ヨリ使節法黎斯ニ至リ拝法相齊候得共彼者元ヨリ日本ニ比較難相成日本使節者迄親熟和之例端ヲ懇ニ為ス使節方歸艦迄自國ヨリ火艦ヲ仕出シ英國嚨喇ヱ相送リ法黎斯ヱ歸舶之上日本國迄送候事

ニ取極候間貴殿其意ヲ含ミ以来之義共柔和熟談彼是サハリナキ様自國海艦入船之折モ下部小僕迄モ念入申含上陸止宿等モ自儘ナキ様懇ニ為スヘキナリ

第二條

自國日本國者親睦之條約ヲ取極メ候一條ハ三日初メ日曜日新聞紙ニ見渇候通リ英吉利國ヨリ申来リ貴國佛蘭西ヲイフ日本國ト約條取極メ候見詰何等之益幾箇之利ヲ可得哉之疑問自國者元ヨリ衆談ヲ盡セシ通亜細亜州諸島ヨリ影多ノ

類品ヲ齎諸港エ輸送為ヘキ為メ極メタル約ニ
アラス中程ノ適宜ヲ測リ諸邦ニ義ヲ交ルノ為
ナレハ英國ニ諸島ヲ探リ小島ニ誓約ナスモ等
キ事ニ返答致候間其意ヲ含ミ居ヘリ候

第三條

江戸神奈川コンシユル官ヨリ箱館エ来為組候
官醫吏レヲンデユリー人名當時留置諸事ニ叶フ
ヘキナリ

第四條

英吉利國コンシユル官アールコツク不幸ニテ
少敷身中ニ疵ヲ設ケ料貨ヲ長崎港ニ於テ受得
タル義不理之沙汰質ヘキナリ

第五條

日本國ハ支那國ニ疑似セル攝政之義近来諸黨
蜂起時變ヲ作リ騷動ヲナセル義支那ヲ英吉利
園候風ニ彷彿タリ英國ハ今ヨリ先十五年前支
那ニ到リ約ヲ極メ候後士民條ヲ反キテ發起シ
且船旗ヲ纖砲ヲ開キ時ニ進ミ時ニ退キ遂ニ爭
暴ニ及ヘリ日本國モ政ヲ落シ約ヲ延ヘ支那ノ
如リ狼徒集群退散セサレハ三十箇月之内英吉

利國船ヲ仕出シ日本島ヲ圍候談既ニ極定セリ
自國ハ義ヲ見信ヲ延ヘ時々意ヲ告ケ送リ慣用
セルハ貴殿ノ考質ニ候間厚ク其意ヲ含ミ長崎
箱館エモ意ヲ加フヘキナリ

以上

法黎斯

任宰相日本國掛

五月三日認　　　　ゼ子ラール中

大日本江戸ニ有

ミニストル官

ドユセスチテベリコール君エ

第七

御老中衆ヨリ英國人エ被相贈候御書簡寫

貌利太泥亞シヤルヘタフヘル

ユキセルレンシー

シヤルレスエウホンテエストルエ

以書翰申入候此度支那國之内貴國所領香港エ
我國商船建順丸貿易之爲メ差遣スヘキ積リ就
而者不案内之客地エ始テ通商致ヘキ事ナレハ
交易之振合等都テ不馴ノ事故彼地在留鎮臺ノ

修史館

周旋ヲ以百事差支無之様イタシ度尤船中取締
之爲メ箱館奉行支配之者爲乘組追々出帆致サ
セ候間此段被心得右鎮臺エ告知有之度此段頼
入候拜具謹言

文久二戌年

五月四日　　久世大和守 花押

水野和泉守 同

板倉周防守 同

右御書簡被相贈候得共香港エ商船被相遣
候義者追々被相止譯ニモ御坐候哉其後之
様子聢ト相分兼申候

第八

御老中衆ヨリ佛國人エ被相贈候御返簡寫

――

――エ

貴國第六月七日附之書翰落手セリ其許
大君エ謁見之節差出サルヽ國書并其許謁見席
之義等縷々申越サルヽ趣其意ヲ領セリ右謁見
席之義ニ付而者當三月八日安藤對馬守邸宅ニ
オイテ同人會晤之砌委細談判及ヒシ如ク我國
列侯之貴官トイヘトモ三疊目迄進出謁見致セル

修史館

国立公文書館
National Archives of Japan

事ナレハ貴國ハ勿論英吉利亞墨利加其他之公
使是迄右拾疊目謁見致サレシ事ニ而聊疎略之
取扱アルニアラサレハ篤ト了解致サレ申入候
場所ニテ謁見之礼典取行ハレ候積リニ被心得置
執テハ謁見日限之義尚又可申入候其節
大君之上意ヲモ可相達候此段答書如此候拜具
謹言

文久二年　久世大和守

五月十九日　水野和泉守

板倉周防守

六月十七日

第九

御老中衆ヨリ阿蘭陀外國事務大臣ヱ被相
贈候御書簡寫

阿蘭陀國外國事務大臣ヱ

以書翰申入候抑我國人先年貴國教師之傳習ヲ
受ルヲ以来我國ニオイテ航海之諸術始而開ケ
其學未タ精熟ニ至ラストト雖モ測定之奥意ヲ得
ントス然リト雖モ巨艦之製作ニ至而者未タ其

工作之場ヲ設ルニ暇アラス今ヲ以急々コレヲ
設ルトモ俄ニ精功ニ至ラン事甚難ンスル所ナ
リ依而各國滯在ノ「ケウヰツトヱスクワイル」エ
貴國ニオイテ蒸氣軍艦打立之義相頼候所同人
ニモ無異義可諾トアリテ其叚貴國エ申達候由
誠以滿足之至ニ候就而者別紙名前之者貴國エ
指遣シ右製造中船打立候方者勿論序ヲ以外諸
術ヲ修業為致度右學料之義者其名目之處ヲ以
夫々取極可學習諸事可然周旋頼入候右船ノ大
サ馬力強弱砲銃之負數右同人ヨリ被申達義者

存スル間今コヽニ贅セス此叚申入度如斯拜具
謹言

文久二戌年　久世大和守 花押
六月十七日　水野和泉守 同
板倉周防守 同

別紙
傳習人名前

取締役 内田恒次郎　士官 榎本釜次郎
士官 澤太郎左衛門　士官並 松代三郎
士官並 田口盛平　同 津田真一郎

同 西田周助　　官医 伊東玄伯
官医 林研海
外ニ
水夫小頭　測量師　鍛冶職　鋳物師
水夫等凡而七人
通計十六人

第十
同断

阿蘭陀コンシユルセ子ラール
ヱキセルレンシー
イカテノウ井ツトヱ

以書翰申入候此程貴國ニオイテ軍艦打立之義
相頼候ニ付右製造中傳習人等貴國ヘ指遣シ度
段兼而其許ヘ相頼置候所此程出立候期ニ至リ
明十一日我軍艦咸臨丸ニ乗組先ツ崎陽ヘ向出
帆イタサシメントス就而ハ同所着之上者貴國
便船ヲ得テ渡海セシムヘク貴國着之後官府之
周旋ヲ受ン事不少義ト存スル間別紙寫之通我

等ヨリ貴國外國事務大臣ヘ書簡指贈候間違方被取計度猶其許ヨリモ可然申贈ラレ候樣賴入候此段申入度如斯ニ候拜具謹言

文久二戌年　久世大和守 花押

六月十七日　水野和泉守 同

板倉周防守 同

第十一

御老中衆ヨリ佛國公使ヘ被相贈候御返翰寫

佛蘭西全權ミニストル

ヱキセルレンシー

トセンテヘレクルヱ

貴國千八百六十二年第七月五日附新聞紙ヲ封入セル書翰落手セリ先般我方ヨリ指遣セシ使節之輩此程貴國都下ニ着シ其國帝殿下ニ謁見

之禮式無滯相濟殊ニ使節等優待ヲ受ケ段其許
ヨリ差贈新聞紙之面ニ而委細了解シ我 大君
殿下満足被思召我々ニオイテモ喜悦之至ニ候
其待遇懇篤護衛之鄭重ナル實ニ貴國之厚意ヲ
表スルニ足レリ後来両國交誼之長ク保存セン
事等ヲ以テ證トスヘキナリ何レ其許面語之上
委細謝辞可申入候得共不取敢回答如斯候拜具
謹言

文久二年　　　脇坂中務大輔 花押

六月廿二日　　水野和泉守 同

板倉周防守 同

七月二日

第十二

御老中衆ヨリ亞國公使ヱ被相贈候御書簡寫

亞墨利加合衆國全權ミニストル

レシデントミニストル

ロヘルトヱツフライン

以書翰申入候方今支那ニオイテ痧病流行セル趣傳承シ一躰傳染病之者乗組候舩我港内ヱ繋泊致候義者素ヨリ有之間敷ト存候得共萬民ノ

憂ニ相成候事ニ候間支那ヨリ渡来之船證状所
持セサル分者我開港場エ繫泊之義指留候様各
港在留之貴國「コンシユル」エ通達有之度候拜具謹言

文久二戌年　脇坂中務大輔 花押

七月二日　水野和泉守 同

板倉周防守 同

七月廿六日

第十三

御老中ヨリ英國人エ被相贈候御返簡寫

貌利太泥亞シヤルセタヘール兼

ヱキセルレンシー

インシント・ジヨンニールエ

貴國第七月廿五日附十八号之書翰落手被申越
趣領承セリ一躰無人島ト稱者小笠原之作稱ス
ル事ニ有之追而船中之欠乏之品ヲモ備ヘ給セン

ト我カ計レル上者彼我之通交ニオイテ國ヨリ
差障アル事ナシ尤規則之義者同島ヘ差遣シ候
外國奉行等取極メシ書面先ニ相違セシカト疑
譯之英文難解趣ニ付則蘭文ニ取直シ差進候間
右ニ而了解有之事ト存候右貳通之返書如斯ニ
候拜具謹言

文久二戌年　脇坂中務大輔 花押
七月廿六日　水野和泉守 同
　板倉周防守 同

第十四

御老中衆ヨリ亞國公使ヘ被相贈候御返簡
寫

亞墨利加合衆國全權兼ミニストル
レシチント、ヱキセルレンシー
ロベルト、ヱフ、プテイン　ヱ

貴國第八月十五日附百五号之書翰落手貴國之
種ヲ以其宿寺及ヒ神奈川ニ在ルフロイセンコ
ンシユルヘールカラルリ同所ニオイテ栽培セ
シ趣之種々之珍菓美菜并ニ同人ヨリ支那江南
産之符茶其許之紹介ヲ以被相贈旨被申越委細

領承厚誼之至何レモ厚受納致候菜菓等之種ハ此方食用トシテ利益アルヘキヲ如何ニモ来意ノ如リ思ハルレハ猶其種子ヲ乞フテ試ニ播種セシムヘキ思ヒアレハ聊ツヽ相贈ラレ候様ニ望マシク候随テ別紙目録之品ハ右謝物ニ當ル迄ニモアラサレトモ同シク此國ノ産タルヲ以差贈候間受納致サレ度將其誼之意ヲ以ヘールカラルクニモ贈アリテ其厚意ヲ謝サレナハ滿足之至リニ候此段答書如斯拜具謹言

文久二戌年　脇坂中務大輔　花押

八月五日　水野和泉守　花押

別紙

目録

一宇治産濃茶　一壺

一秋菓　一籠

修史館

第十五

御老中衆ヨリ佛國公使ェ被相贈候御返簡寫

佛蘭西全權ミニストル
ヱキセルレンシー
ドセンデヘレクルエ

貴國第八月廿六日附之書翰落手支那ニオイテ疹病流行セルニ付同所ヨリ渡来スル船々之義

二付我七月二日附之書牘ヲ以申入ラレシ趣承
諾セラレシ段申越ル、條領承セリ將我邦ニオ
イテモ疫病流行ノ災害ヲ蒙ル者少カラサル旨
傳承セラレ我國醫師ト外國醫師ト集會シ治療
之上ニオイテ互ニ經驗セシ事ヲ報告セハ萬民
ノ為ナルヘキニ而縷々報告セラル、段厚意忝
存候我邦ニオイテ疫病流行セルハ近年之事ニ
而治療ニオイテモ未分明ナラル樣思ハレハ来
示之旨ニ從ヒ醫師両人神奈川ヱ差遣シ外國醫
師之内治療功者之者ヱ質問為致度尤委細之義
者猶神奈川奉行ヨリ其許ヘ可申入間互數周旋
頼入候此段拜答如斯ニ候拜具謹言

文久二戌年

八月廿七日

脇坂中務大輔 花押

水野和泉守 同

板倉周防守 同

閏八月十日

第十六

御老中衆ヨリ魯國外國事務大臣エ被相
贈候御書簡寫

魯西亜國事務大臣
ヱキセルレンシー
フユルチエコフエ

先般我國兵庫及ヒ西海岸之港ヲ開キ江戸大坂
ノ市中ニオイテ外國人之商業ヲ營ムヘキ期ヲ

延サンヿセシ事ニ付我　大君殿下ヨリ其國帝
殿下エ書簡ヲ以申入ラレシニ國帝殿下ニモ速
ニ承允有テ此度特ニ我箱館港在留貴國コンシ
ユルコシケウイチヱスクウヰイル、ヲシテ右返翰
ヲ　親呈セラレ　大君殿下ニモ滿足思召サレ
タリ且我等前職久世大和守安藤對馬守ヨリ同
断之義其許迄申入置シ所右返書差送ラレ我方
望之通兵庫及ヒ西海岸之港ヲ開ク事ヲ七ヶ年
之間延引イタサル段領諾セラレシ趣余等ニ於
テモ欣喜之至ニ候尤他條約濟國々之中前條之
義ヲ拒ミ或ハ期ヲ縮セントスル時者貴國モ同
様タルヘク旨被申越委細差含ミヌ此段我等ヨ
リ其許迄回答可致旨　大君殿下ヨリ被命タリ
將客歳中貴國軍艦對馬島エ繫泊セシ一條ニ付
別而一通之返簡ヲ被差越右者全ク一時之行違
ニシテ其政府之意ニ不出段彌明白ナレハ茲ニ
コレヲ既往之事ニ附シテ再ヒ答詞ヲ贅セス拜
具謹言

文久二年

閏八月十日

脇坂中務大輔 花押

水野和泉守 同

板倉周防守 同

閏八月十一日

第十七

御老中ヨリ英國公使ヱ被相贈候御返簡寫

貌利太泥亜格外公使全權兼

ミニストルヱキセルレンシー

イーシントション ニールヱ

貴國第九月十四日附之書翰落手セリ冨士登岳被致度申越サルレ共右者先比亜國公使ヨリモ申立ラレシニ人心不居合之折柄道路掛念モ不少ニ付當分見合ヘキ旨外國奉行ヲシテ説諭セシメシニ同人義者思ヒ止ラレタリ加之此程生麦殺傷一條ヨリ猶一層之配慮モアレハ其登岳モ先當分之内見合候様致度尤外場所ニ而モ同様之義ナレハ是又思ヒ止ラレ度此段報告如此候拜具謹言

文久二年

脇坂中務大輔 花押

閏八月十一日　水野和泉守　同

板倉周防守　同

第十八

御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御書簡

寫

亞墨利加合衆國全權公使兼

エキセルレンシー

ロヘルトエツフライン　エ

以書翰申入候品川臺使臣館建造ニ付テハ地代
并入費差出シ等之義我八月十二日附之書簡ヲ
以前職久世大和守安藤對馬守ヨリ其前任公使
ハルリスエスクルワイルエ打合及ヒ置シニ其
後英公使ニハ地代金之義百坪ニ付一箇年金三
兩ツヽ之積ニ談判イタセシ間各國ニ於テモ右
同様心得ラレ度且建物普請ハ此方ニテ取補理
落成之後ハ惣入費十分之一之割合ヲ以質借料
トシテ年々永久差出候様確定セリ其許ニオイ
テモ繪圖等差越サレシ上ハ總テ右振合ニテ異
存無之事ト思ハレ爲念打合ニ及ヒ候間否速ニ
回答有之度拜具謹言

修史館

文久二戌年　水野和泉守 花押
閏八月廿二日　板倉周防守 同

但佛蘭西并阿蘭陀ヱモ同文言ニテ同日
被遣候事

第十九

英國ヨリ各國ヱ相贈候書簡寫

此節外國方ニ而採リ得飜譯出来候所粗其大意
日本政府貳百五十年前ハ天子ヲ服従セシメ古
来之天子ヲシテ政事ニ預ラザラシメシニ當
時ハ其權衰ヘ十八國主異議ヲ生シ天子ハ其
機ニ乗シ古之權ヲ復セントシ此カ為ニ混雑ヲ
生シ日本政事ニテハ實ニ外國人保護相成兼候

間依而ハ此地ヲ日本ヲ去引拂候歟又ハ其權アル所
ヱ向ヒ別ニ條約ヲ結ヒ候歟又ハ各國軍船ヲ發
シ日本政府ヲシテ速ニ其政事ヲ改革セムル歟
之外ハ無之此義早々評決アルヘシ云々之書面ニ
御座候
此間モ「ジヨンニール」申事ニ近日日本中轟キ候
程之事申来ルヘシト申候由ニ御座候

第二十

英國公使ヨリ御老中衆ヱ相贈候書簡寫

西暦千八百六十二年第十月一日

呈

外國事務宰相名下

琉球島ヲ領スル權威之事ニ就テ疑敷且齟齬セ
ル説ヲ生スルヲ以此島ハ日本大君、及政府如
何ナル関係有リ之ヤ委シク承ランカ為ニ今台下ニ

書簡ヲ呈スルハ余カ職分ヲ思ヘリ此島ノ事ニ就而浮薄ナラスシテ信用スヘキ説ヲ承ハル時ニハ决シテ右様之質問ヲハナサヽル事ヲ注意シ給ルヘシ而シテ又此等之事ハ貴答之遅延セサル事實ニ肝要ナリト注目シ給ン事ヲ乞フ否ラサレハ不列顛之名代日本ト通親好和ヲ結フ諸國之人民モ事實ヲ慥ニスルコト能ハス且此事件ハ余此書簡ト貴答トヲ公ケニ收メ置ント欲ス此事ヲ台下ニ注セシムルハ余カ任トスル所ナリ此書簡ハ急速且大切ナル事件ナリ

不列顛公使エドワルドスト
ションニール手記

日本在留書記官
エルエウステン譯

九月

第二十一

御老中衆ヨリ英國公使エ被相贈候御返簡寫

附
一別紙寫

貴國第十月一日付三十八号之書翰落手琉球島我所領有無之確説ヲ承知可致トノ義領承セリ右島ハ昔年ヨリ我國之所属タリ我慶長十四年松平薩摩守家久ニ付與セシ以来今ニ至ル迄一島之所務同家ニ而諸事進退スル事ナリ尤同島者古ヨリ唐土エモ通信セシ故島内ニ而唐土之制度ニ従フ廉モアレ共其旧習ニ任セテ又是ヲ禁スル事ナシ當古之記中ヨリ概畧ヲ抄セシメ別紙ニ付送スレ者委細ハ右ニ而分明タルヘシト思ヒヌ此段回答迄如此ニ候拝具謹言

戌九月　水野和泉守
板倉周防守

別紙

琉球島ハ我文治年中ヨリ聘禮ヲ行ヒ来リシカ嘉吉元年當松平修理大夫先祖島津忠久カ時ヨリ同家ニ服従シ毎年貢物ヲ捧ケシカ共我慶長年間島主違命之事アリシニヨツテ同十四年忠久之後裔松平薩摩守家久同島エ兵舩ヲ指渡シ其罪ヲ問シニ一島降伏セシ故　大君殿下之始

祖其功ヲ賞シテ同島ヲ家久ニ賜リシ以来　大
君殿下代替リ之節ニ改而同家ヱ賜ル事ニテ我
政府ニオイテ大禮ヲ行ヒ又島主新ニ家ヲ継シ
節等ハ島主名代之使者江戸表ヱ指越當島主継
立之時者薩摩守進退ヲ受ル事ニ而其餘同家ヨ
リ平常人數指渡シ置島内之所務諸般取計ヒ候
事ナリ然レトモ其服飾制度等者最初ヨリ島民
之仕来リヲ改サリシニヨリ唐土明之代ヨリ今
之清朝ニ至ル迄同國ヘモ使者来往シ其封爵ヲ
受ル事ヲモ亦禁セサル所ナリ琉球古記録中ヨ
リ抄セシ趣如此

九月十二日

第二十二

御老中衆ヨリ英國岡士ヱ被相贈候御書
簡寫

貎利太泥亜シヤルヘタフヘール
コンシエルセ子ラールヱキセルレンシー
イーシントシヨンニールヱ

貴國第十月二十七日附第四十四号之書翰落手
セリ政事總裁職災害ニ逢ルトノ風説聞及ル、
趣申越サルレトモ右者全ク無根之風説ニ有之
候且政事變革セシ廉者是迄諸侯隔年ニ一年ツ
ヽ都下ニ在留セシ處以来三ヶ年目ニ一度ツヽ
出府各交代ノ期定メ凡百日程ヲ限都府ニ在留
之為メ妻子等モ在邑ヲナサシムル事勝手タル
ヘキ事トナリヌ其他些少之變革者アレトモ別
ニ可申入程之廉無之候此段荅書如斯ニ候拜具
謹言

文久二戌年　水野和泉守 花押
九月十二日　板倉周防守 同

第二十三

御老中衆ヨリ亞國公使エ被相贈候御返簡

亞墨利加合衆國ミニストル
レシテントエキセルレンシー
ロヘルトエツラフイン エ

貴國十二月五日附第百三十六号之書翰落手セ
リ貴國我ト取結ヒシ條約改正可及條々其許見

迄之所草本ヲ以申越サレ熟覧及ヒ候節外國奉
行菊地伊豫守井上信濃守ヲシテ其許ニ就テ猶
細議セシメントスル篤ト被打合候樣存候拜具
謹言

文久二戌年

十一月六日

水野和泉守

板倉周防守

小笠原圖書守

第二十四

英國公使ヨリ御老中衆エ相贈候書簡寫

千八百六十三年第一月三日

呈

外國事務宰相台下

昨夜外國奉行急ニ余ヲ訪ヒ給ヘリ是台下ノ命
ニ因テ外國人ニ劇シキ危難ノ風聞ヲ報告セシ
メ且一組ノ浪人第一ニ外國ノ名代人ヲ殺害セ

ント謀ルヿヲ知ラシメンカ為ナリ
台下ヨリ今余ニ尚未タ他國ニ於テ有ラサル所ノ報告ヲ為シ給フヲ以テ當館在留ノ者共并ニ此港ニ在留スル英吉利臣民等ヨリ將ニ至ラントスル危難ニ意ヲ配リ用心シ給ルヘシト女王殿下ノ「ミヤルヘタフヘール」ヲ勤ル余ニ請ヒタリ日本ト親睦ノ條約ヲ結ヘル他國ノ名代人ヘモ亦右ノ報告ヲナシ給ヘリ
異人等ニ兇悪ナル暴人ノ企ル所業ヲ避シムルハ各國政府ノ權威ニ在ル所タリ殊ニ此國ニ於テハ假令日本人ノ害心ナキ者ト雖氏異人ノ居所ヲ訪フ事ヲ許サス又偶訪フ者アル時ハ日本ノ見廻リ役人ヨリ奉行ニ告ケ直チニ手分ケシテ捕フル事ナリ
今爰ニ一組ノ浪人及ヒ殺害ノ蜂起セシ事ヲ余等ニ告ケ夫ヨリ日本政府ニテ慥ニ彼等ヲ召捕フヘキ手配ヲ為シ或ハ彼等ノ目的ヲ遂ルヿ無ラシメンカ為ニ最モ至要ナル諸般ノ法令ヲ行ヒ給フト思ヘリ
異人等ノ取リ行フヘキ用意并ニ手配ハ自身ニ

テ届クヘキ丈ケノ諸術ヲ竭シ置テ若シ暴人ニ侵サレ或ハ襲ハレシ時ニ當リ其性命ヲ保護セシカ為メナリ

台下ヨリ能ク注意シテ配慮スヘシトノ報告アリタレモ絶テ他ノ趣意アルヿナシ

條約書ニテ許シ給ヘル境界中ハ何ノ所ニモ自在ニ行ヘキ免許アリテ今又際限ナク之ヲ防ケ且ツ之ヲ限ルヿ能ハス而シテ日本政府ヨリ右様ナル自己ノ防禦ヲ行フヘシト望ムヿ能ハサルヘシ

右様ナル形勢アル時ニ當テ政府（此政府ト云ルハ暗ニ日本政府ヲ指シ云ナルヘシ）ニテ無頼ナル悪漢等ヲ境界ノ内ヨリ逐ヒ出シ召捕ヘ又驅逐スル為ニ至要ナル手配ハ實ニ際限アルヘカラス而シテ若此規則ヲ設サル時ニ當テ前知スヘキ危難ノ生スル時ハ政府（此政府ハ暗ニ英ノ政府ヲ指シテ云フ）ニ對メ罪ナシト謝スヘキ辭アルヿナシ余嘗テ我本國ノ軍隊并ニ海軍ヲ助勢ノ為ニ呼ヒ寄ヘキ書簡ヲ贈ラントセシニ台下ヨリ其事ハ無益ナリト書ヲ贈リ給ヒシヿアリ

若シ台下素ヨリ持チ給フ所ノ權ヲ以テ處置シ給フニ於テハ東海道モ亦台下ノ居邸ノ墻内ニ於ケルカ如ク同様ニ安泰ニ為シ得ヘシ

若シ茲ニ不幸ナル暴行アル時ハ其事ハ　大君政府ノ引受ケニナルヘシト思ヘリ

若シ日本政府ニ於テ嚴ニ日本人ヲ防禦スル威カナシト告ケ給フ時ニ至テハ法ノ如ク他ノ手配ヲ用ユヘシ恐惶謹言

貎利太泥亜シヤルヘタフヘール

イシントシヨンニール手記

日本在留書記官

エルエウステン譯

第二十五

御老中泉ヨリ各國公使ヱ被相贈候御書簡

寫

以書翰申入候我　大君殿下御後見一橋中納言殿上京中仙道通行之趣先般通達ニ及ヒ置シ所此度東海道之方ヱ道ヲ替ヘ上京致候間此段報告及ヒ候拜具謹言

戌十二月十四日

水野和泉守

板倉周防守

夷匪入港録巻一終

讀合

高麗環

川崎與十

国立公文書館
National Archives of Japan